

## 2015年2月6日に徳島県で震度5強を記録した地震の意味

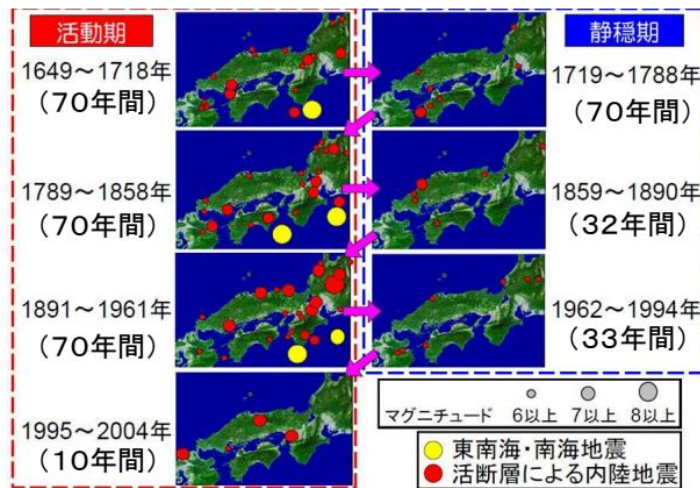
前回のニュースレターで、今回は東北地方沖合の地震活動（アウターライズ地震を含む）の解析を予定していましたが、今回は2月6日に徳島で発生した地震に関する解説情報です。

すでに皆様メディアでのニュースでご存じのように、2月6日に徳島県で中規模の地震が発生しました（マグニチュードは5.0）。以下は気象庁ウェブでの震度情報です。実はこの場所では、極めて珍しい地震であったのです。



四国を含む西日本では、通常は体に感ずる地震は関東地方の1/10以下です。たとえば東京では年間30回以上の有感地震がありますが、四国では年回数回といったところです。

江戸時代からの地震活動の推移を見てみますと、南海トラフ沿いの巨大地震の前には内陸で地震活動が活発化しているという事は、複数の地震学者が指摘しています。



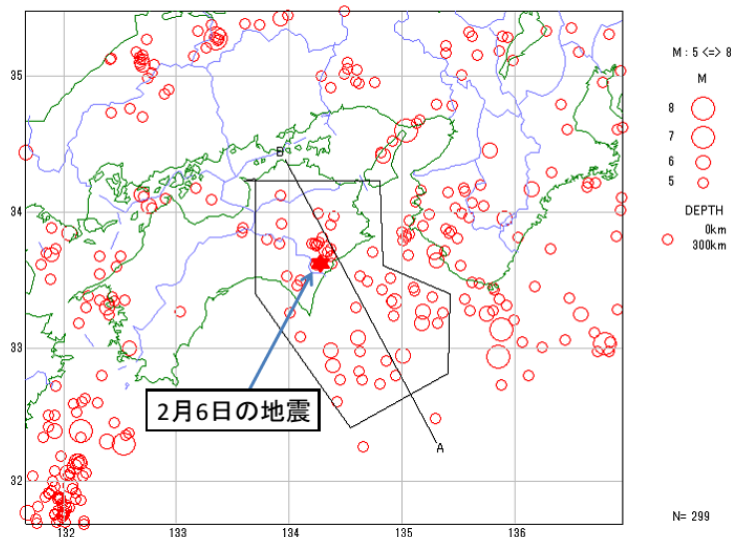
この図は平成20年に、中央防災会議東南海・南海地震等に関する専門調査会座長の土岐憲三氏が、尾池和夫氏(元地震学会会長, 元京都大学総長)の原因をもとに作成された図を一部改編しています。

上の図は、右側の静穏期の長さが違いますので、単純な比較はできませんが、このような議論が国レベルでも行われているという事の証拠として掲載させていただきます。

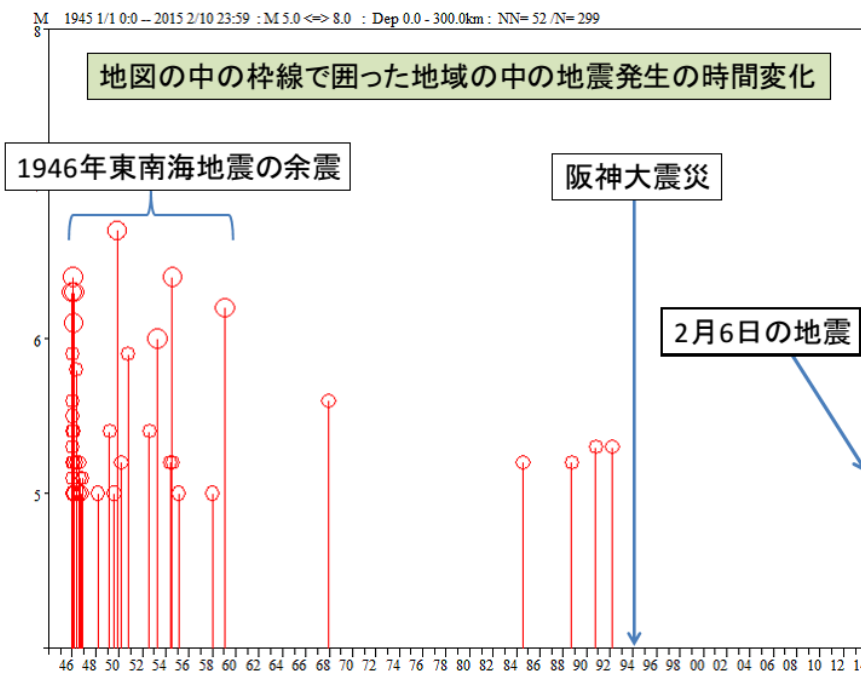
それでは、2月6日の地震はどのように考えれば良いのでしょうか。

**2015年2月6日に発生した徳島県で震度5強を記録した地震の位置づけについて**

1945 1/1 0:0 — 2015 2/10 23:59



上の図は1945年から2015年2月6日までの約61年間にこの地域で発生したマグニチュード5 (M=5) 以上の全ての地震を図示しています。そして中央の多角形で囲んだ地域でどのような時間間隔で地震が発生しているかの図 (時系列の図) を下に示します。



この図からもわかりますが、多角形の中で発生した地震は、ほとんどが1946年の南海地震の余震です。そしてしばらくの間、M=5以上の地震は発生せず、阪神大震災の前に、再びまとまって発生しているのがわかります。そして20年以上が経過し、再びこの地域でM=5の地震が発生したのです。

我々は、日本列島の地下は着実に次の南海トラフ沿いの巨大地震に向けて準備を進めているという事を常に認識し、普段から防災意識を高く持つ事に留意しなければならないと思います。今後は近畿圏では、比較的規模の大きな地震 (内陸の活断層型の地震) の可能性も高くなっていると推察されます。